
意識の果てに～彼女の思考～

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意識の果てに〜彼女の思考〜

【Nコード】

N1625P

【作者名】

紅月

【あらすじ】

彼女はふと考える。考えること、自身の意識の果てを。

一人でぼーっとしているとむくむくと膨れ上がってくる思考がある。

それは毎度同じことなのだけれど、結論が出ないから何度も何度も何度も何度も、考えてしまう。

私はどこまで「私」でいられるのだろうか。

いつ死んでもおかしくないとされている（私自信はそんなつもりは微塵もないが）私の体。そんな体だったせいかな、年齢にして小学校の高学年の頃には馬鹿のようにそんなことを考えていた。

私は輪廻転生というものを信じている。否、夢を見ているといった方が正しいのだと思う。

とにかく、死ねば魂は輪廻を巡り、新しい肉体を持って生まれ変わるという。肉体は朽ちるから新しいものが必要になるだろう。

では、その意識は？
魂によって生まれるのか、肉体が形成するのかわからないからこそ気になる。

もしも、魂によって生まれるものならば意識も輪廻を巡るのだろうか。はたまた、肉体と共に朽ちてしまうのか。

そんなことを考えながら私の意識は深いところへ潜っていく。

どうなるのか、と考えながら私の中では一つの考えが確固たる形で存在している。

死は眠りだという。

死を隣にして死なない私にとっては死は冗談でしかないのだけれど、意識についてはそう考えることができた。

意識は眠るのだと。
眠りは意識の上では一瞬。

つまり死んだら「私」はまた「別の誰か」として目覚めることができるのだと。

その光景を想像する。しばらくすると「私」の意識が、意識の境界があやふやになったような感じがしてくる。

そこまでするといつも強制的に戻されてしまう。

何がそうさせるのかは分からない。ひょっとしたら私の意識が溶けて消えることを拒んだ本能的なものだろうか。

ふと窓の外を見れば、日がかなり傾いてきていた。時計を見れば四時半を過ぎていた。

今日は彼が来るはず。

昨日の夜にパソコンの方に連絡が来ていたから、それは間違いないだろう。

しかも兎の夜のロールケーキを持ってきてくれるのだ。今から楽しみにして仕方がない。

今日は彼とこの事について話そう。

こんな話を真面目に聞いてくれて、きちんと返事をしてくれる私の貴重な、友人かはよくわからない知り合い。

さあ、彼を迎える準備をしよう。使い捨ての紙皿と紙コップはある。冷蔵庫にはお茶もある。

特にやることがなかった。

(後書き)

どうでもいいあとがき。

この短編を読んでくださってありがとうございます。

自分にとっての考えです。

死んだら、と考える分には若すぎるのかもしれませんが、実際にこんなことを考えています。

どうしても『死』意識の停止』にはならないんですね。

彼女とは死の概念は違いますが、意識の考え方は被らせました。なんか、つい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1625p/>

意識の果てに～彼女の思考～

2010年11月27日04時01分発行